



少し先の終 わった話

Yuki Kannagi

これまでのこと

「これからお話しするのはね、とっても短いお話なんだよ。
そう、もうすぐ消えてしまうこの世界にあったお話だよ」
一人の老人はそう言って顔を上げた。

それまでの話し

「この世界には沢山の生物が住んでいてね、綺麗な星だったよ。
え？ 何故今はこんなにも荒れているのかって？
それはね私たちと同じ『人』が関係しているんだよ。
ちょっと前まで人間は素晴らしい技術を持っていた、空を飛ぶ乗り物や地をととても速く走る乗り物。
すごいよね、でもそれが間違いだった。
それらはまとめて機械と呼んでいた。
機械は沢山のガスや油を出してこの星の環境を壊していった。
その結果がこれさ」
老人は目の前に広がる大きな溝を指差した。

そして.....へ

「自分たちの行いがこの星を傷つけていることをそのときの人たちは知っていたよ。
じゃあなぜそれを止めなかったか、多分ね.....
手に入れた栄光を捨てたくは無かったんじゃないかなあ。
そのときの間人は動物や植物の上に立っていたからね、一番を維持したかったのかな？
空を飛べない人は鳥に負ける、速く走れない人は動物に劣る。
怖かったから変えなかったんだよ、それまでの自分たちを。
そしてこの星、地球は廃墟へ変わってしまった」
老人の瞳にはうっすらと涙が浮かんでいた。

それから今

「昔、この星には大きな海があったんだよ。
知らない？ 海って言うのは大きな水溜りかな？
ただね、とてもしょっぱいんだよ塩が入っていてね……ハハ
でも人間はすごかった。そのしょっぱい海でさえも私たちが命がけで取ってくる飲み水に変えて
しまったからね。
今海が無いのとは関係ないよ、それから今に至るからね。
海がなくなったのは人間が地中深くまで潜れるようになったからだ。
その距離はだんだん伸びてきて、最後には真ん中……地球の中心にたどり着いたんだ。
しかし、それは失敗だった。そこにきたことでこの星の運動が完全に狂った。
地表の温度が上がり、海が干上がった。ここで海の水を使っていた国が滅んだ。
それから地球が太陽系から外れた、これは天文学者でも予想がつかない出来事だった。
それで今の隕石が降り注ぐ荒れた星に成ってしまった訳だ……」

老人は近づいてくる漆黒に向けて目を細めた。

これから来る終わりに

「さて、ここいらにしておこうか。昔話は終わりだよ。

何？ まだ聞きたいだって？ 冗談。

.....だったらこれからの話をしてやろう。

ウンウン、良い子だ。

良いかい、これから私たちは消えるのさ、いいやこの星ごとね。

怖がる事はない、痛くないしまずどうなるかは分からない。

空の上に黒いのが見えるだろう、そうしばらく見えているアレだ。

アイツが何か分かるかい？ よく知っていたな.....

そうアレは『ブラックホール』だ、ものすごい勢いでこの星を吸い込んでいるんだ。

そう地球は消えるのだよ、跡形もなくね.....百年生きてきたがこれは見事だ。

最後に抗ってみたいだ？ 何をするのかな？

なるほどな、今までの話を本にしておこうと。

で、置いておく。運よく吸い込まれないことを願って？

よし、良いだろう。私たちの軌跡だ、今さら反対する理由も無い。」

老人は紙に綴っていくこれまでのことを覚えていること全てを、近づくのは闇。ただひたすらの闇。

目を閉じて人を抱く腕に力を入れる。

「最後まで一緒だ」

地球が消滅するまでの短い話

あとがき

閲覧してくださった方、始めましてYukiと申します。初めての作品で至らない所などあるとは思いますが、よろしくお願ひします。

さて今回の物語は初挑戦の短編でございます。後味スツキリの意味不明作品ですが許してやってください。

今回はここで失礼させていただきます、長文失礼しました。